

富山県小矢部市

白谷岡ノ城北遺跡・白谷竹屋橋Ⅰ遺跡

—白谷地区土地改良総合整備事業に伴う試掘調査—

1990

小矢部市教育委員会

序

小矢都市域では、すでに主な地区で土地改良事業が完了し、一部を残すのみとなっておりました。この度、計画が難行しておりますた白谷地区についても、いよいよ平成元年度から事業が起工されることとなりました。

一方、当市は先年、鷹文時代中期～後期の加工木柱など大変貴重な遺物が発見され、注目を集めた桜町遺跡をはじめとする県下有数の遺跡の宝庫として知られております。白谷地区についても例外ではなく、今回調査を実施した白谷岡ノ城北遺跡・白谷竹尾橋Ⅰ遺跡をはじめ白谷岡村遺跡、白谷柄分Ⅰ・同Ⅱ遺跡など多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

埋蔵文化財は、郷土に生きた祖先の生活や文化を今に伝える貴重な歴史的、文化的遺産であり、これを守り未来へと伝えてゆくことも今に生きる私達の責務と言えましょう。

そのような事由で、土地改良事業に先立ち、埋蔵文化財の保護措置を講ずるため遺跡の範囲・性格の明確化を目的として白谷岡ノ城北・白谷竹尾橋Ⅰ遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、白谷岡ノ城北遺跡は奈良・平安時代～中世を中心とする集落跡であることが明らかとなりました。今後はこの成果を踏まえ、事業の実施にあたってはその保護をめぐり十分に論議を重ねてゆく必要があります。

最後になりましたが、調査にあたりご協力いただいた地元・土地改良区の方々、富山県埋蔵文化財センターはじめ関係各位に心から感謝の意を表するしだいです。

平成2年3月

小矢都市教育委員会

教育長 岩 奉 敬 正

例　　言

1. 本書は平成元年度に小矢部市白谷地区土地改良事業に先立ち実施した、白谷岡ノ城北遺跡白谷竹屋橋Ⅰ遺跡の試掘調査の概要報告である。
2. 調査期間・発掘面積は以下の通りである。
第1期調査：平成元年6月15日～6月21日 発掘面積：170 m²
第2期調査：平成元年10月12日～10月25日 発掘面積：410 m²
3. 調査は、調査事務局を小矢部市教育委員会におき、国庫補助金並びに県費補助金の交付を受けて小矢部市教育委員会が実施した。
4. 調査参加者は以下の通りである。
調査担当者：山森伸正（小矢部市教育委員会社会教育課文化財係主事）、島田修一（富山県教育委員会派遣文化財保護主事）、塙田一成（小矢部市教育委員会社会教育課嘱託）
調査作業員：岡本豊弘、岡本正穂、沢田吉郎、高島喜久、高田久一、中田幸次郎、野村三郎
山田吉久、山本義信、新井玉子、上島みさを、上島和子、上山文子、坂井久子、坂田年子
沢田ふさ子、沢田富美子、背戸とし子、高崎みよき、中島ヒロ、中田八千代、中村みのり
山崎美智子、山下ユキ子、山田みつい、山村たつい、山本節子
5. 調査期間中は、地元白谷地区の皆様には飲料水・休憩所の提供など大変お世話になった。記して厚く御礼申し上げる。
6. 本書の作成・資料整理には下記の方々から種々のご援助を頂いた。記して謝意を表したい
蟹谷百合子、福島きみ子、早助よし子、森谷奈利子
7. 本書の編集・執筆は、伊藤隆三（小矢部市教育委員会社会教育課文化財係長）ほか同係員の助言・協力を得て島田が行った。
8. 出土遺物および図面・写真類は小矢部市教育委員会が一括して保管している。

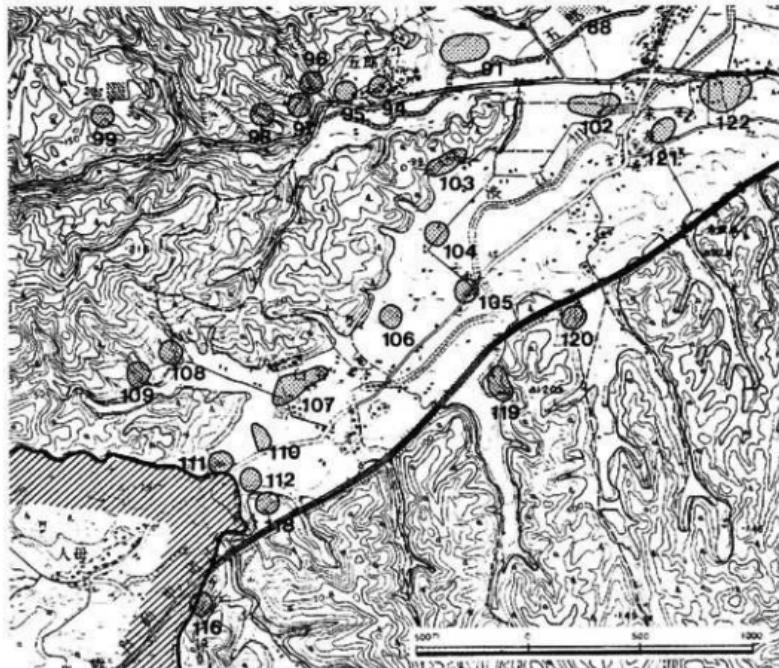
目　　次

I. 遺跡の位置と環境	1	(2) 第2期調査	6
第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡	1	(3) 出土遺物	6
II. 調査の経緯と経過	2	第3図　試掘調査位置と遺跡の範囲	7
1. 調査に至る経緯	2	第4図　遺物実測図	9
2. 調査の経過	2	第5図　遺物実測図	10
第2図　調査対象地と周辺の地形	3	IV. まとめ	11
III. 調査の概要	5	引用・参考文献	11
1. 白谷竹屋橋Ⅰ遺跡	5	図版	
2. 白谷岡ノ城北遺跡	5		
(1) 第1期調査	5		

I. 遺跡の位置と環境

小矢部市は富山県の最西部に位置し、市域の南北および西部の三方は丘陵性山地に囲まれ、宝達山中でその西端を石川県と接している。東部では、散居村地域として著名な砺波平野が広がる。渋江川、子撫川などを合わせて北流する小矢部川は市域を大きく東西に二分する。この小矢部川左岸から丘陵地にかけては、県下でも有数の遺跡密集地帯として知られる。

白谷岡ノ城北遺跡、白谷竹屋橋Ⅰ遺跡は、小矢部市の中心街石動から南西へ約8kmの白谷地内に所在し、奈良・平安時代～中世の遺跡として周知されていた。地形的には渋江川の左岸に広がる段丘上に立地し、標高55～75mを測る。一帯は、渋江川の両岸に沿って段丘が発達するものの、その浸食による支谷があり込み複雑な地形をみせる。このような自然地形上の条件とあいまって、周知には白谷岡村遺跡（縄文中～後期）、白谷柄分Ⅰ遺跡（縄文中期）、白谷柄分Ⅱ遺跡（縄文中・後期）、白谷岡ノ城遺跡（縄文晚期）など縄文時代の遺跡が多く分布し、当地域の中核的な遺跡群を形成する。しかし、当地域には本格的な調査の手が及んでおらず、これらの遺跡の詳細は不明であった。今後の調査によって次第にその実体が明かとなろう。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

- 104. 白谷竹屋橋Ⅱ遺跡
- 105. 白谷竹屋橋Ⅰ遺跡
- 106. 白谷八幡宮遺跡
- 107. 白谷岡ノ城北遺跡
- 110. 白谷岡村遺跡
- 111. 白谷柄分Ⅰ遺跡
- 112. 白谷柄分Ⅱ遺跡
- 118. 白谷岡ノ城遺跡

II. 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

小矢都市白谷地区では、曲折を経て、従前より計画のあった土地改良総合事業が土地改良区の発足とともに本格的に開始されることとなった。

一方、小矢都市教育委員会では市域の埋蔵文化財の分布とその性格を把握し、保護行政を円滑に進め、さらには市民の教育・文化活動に生かすべく、昭和54年度～昭和60年度にかけて埋蔵文化財の詳細な分布調査を行っており、当白谷地域においては昭和56年度に調査が実施されている。調査では白谷岡ノ城北・白谷竹屋橋Ⅰ遺跡を含む10箇所の遺跡が確認・発見され、その成果の詳細は当該年度発行の調査概報〔小矢都市教委他 1982〕及び昭和60年度発行の遺跡地図・台帳〔小矢都市教委他 1985〕に記載され周知化が図られた。

先述の土地改良事業が市教育委員会に知られたのは、工事施工がさしつけた昭和63年の冬のことであった。工事対象区は、下田川より南西の洪江川両岸の段丘・支谷にあたり約57haの規模をもつ。

そこで市教育委員会では、対象地区内に詳しい分布調査を再度実施し白谷岡ノ城北遺跡の範囲の拡がりや、新たに1遺跡の発見などの成果を得た。この成果をもとに地元の方々、土地改良並びに市・県の関係諸機関と保存協議を重ねた結果、まず今年度は、優先的な面工事施工区域となる部分約18,500m²を対象に、国庫並びに県費補助金の交付を受けて試掘調査を実施することとなった。

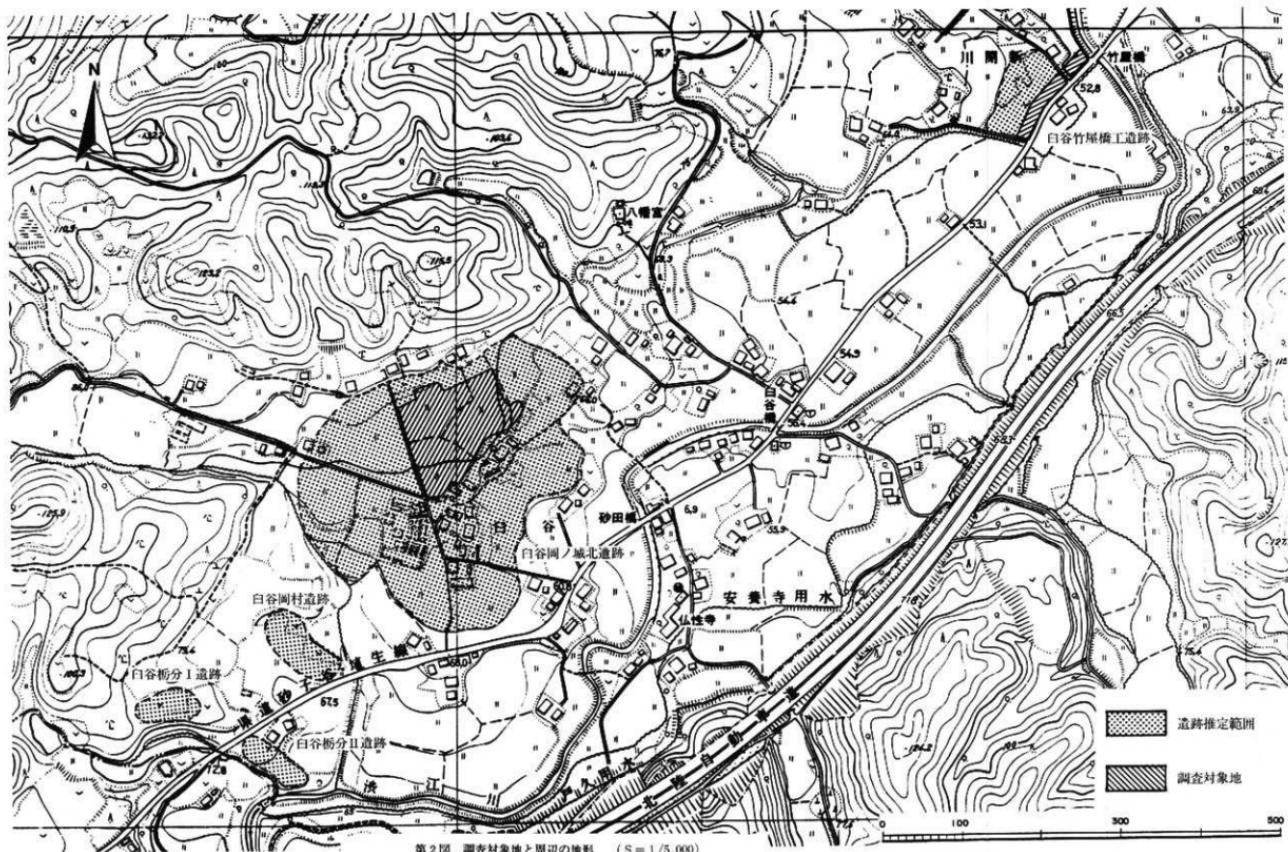
なお白谷竹屋橋Ⅰ遺跡については、下田川の河川改修及びそれに伴う県道砂子谷・埴生線の拡幅工事が遺跡範囲にかかるというものであった。しかしながら、この工事そのものが上記の土地改良事業に連絡して施工されること、さらに工事がより緊急性を帯びている点を考慮し、掘削部分約1,800 m²を対象に、併せて調査することとした。

2. 調査の経過

調査は、白谷岡ノ城北遺跡では休耕田約4,750 m²を対象とした第1期調査、稲の刈り取りを待って残りの部分13,750m²を対象に実施した第2期調査と2回に分けて行った。白谷竹屋橋Ⅰ遺跡については前記の第2期調査に取り込んで調査した。

調査地の現況は水田、畑地である。まず対象地水田の畔を日安に1×1 mの試掘坑を10m間隔で任意に設定し、人力により掘り下げ、遺物の出土密度の高い箇所については幅1~2 m、長さ10mのトレンチを設けるかたちで調査を進めた。なお、白谷竹屋橋Ⅰ遺跡では当初からトレンチ掘りによる調査を実施した。なお今回の調査では、遺物包含層及び遺構の有無確認を目的とした。従って、遺構の検出作業は一部を除き行っていない。

以上、白谷岡ノ城北遺跡・白谷竹屋橋Ⅰ遺跡の試掘調査は、第1期調査着手の平成元年6月15日から第2期調査完了の同年12月25日まで延べ11日間を要した。



第2図 調査対象地と周辺の地形 (S = 1/5,000)

III. 調査の概要

1. 白谷竹屋橋 I 遺跡（第2図、図版1）

遺跡は白谷字川開新に所在し、渋江川左岸の段丘上に立地する。標高約50mを測り、現在は水田・畑地として利用されている。調査は東西に細長く伸びる調査区に平行して7箇所で幅1m、長さ5~30mのトレンチを設定し人力によって掘り下げる方法をとった。

調査の結果、水田部分ではかつての基盤整備の際にかなりの削平を受けており、南東端で時期不明の川跡らしきものを1箇所確認したのみで、明確な遺構は確認されなかった。また、遺物は耕作土中より珠洲焼片が1点のみ出土している。

畠地部分では6箇所で掘り下げた結果、遺構は確認されなかった。ただ、耕作度直下の黒褐色土の堆積状況から、調査区に対して南北方向に微地形としての小谷が入りこむことが確認できた。なお遺物は黒褐色土中より糸切り痕を持つ土師質土器の底部細片2点を出土したにとどまった。

以上、調査期間は平成元年10月12日~10月16日（延べ3日間）、発掘面積約135m²である。

2. 白谷岡ノ城北遺跡（第3~5図、図版2~7）

遺跡は白谷字岡ノ城に所在する。渋江川左岸段丘上に立地し標高は74~77mを測る。当遺跡は先述の昭和56年度分布調査によって新たに発見された遺跡である。以下、第1期調査・第2期調査の順でその概要を記すが、両調査区とも互いに隣接し、いわば同一地区的調査と言える。よって記述の便宜上、出土遺物については合わせて後述する。

(1) 第1期調査

対象地南東部の休耕田約4,750m²を対象として実施した。最初に1×1mの試掘坑を30箇所程掘り下げたところ、南側平坦部ではほぼ全域で、珠洲焼片、土師質小皿などの出土をみた。特にその中央部位では出土密度が高く、遺物の遺存状態も比較的良好であった。一帯の層序は1層耕作土(20~25cm)、2層暗茶褐色土(15~20cm)、3層黒褐色土(40~80cm)と堆積し黄褐色土(地山)に至る。(3層は谷部付近のみに堆積する。)

先の状況から、まず十文字にトレンチ(①・②トレンチ)を設定し調査を進めた。その結果遺構では、3箇所で集石状の遺構、2層~3層上面で柱穴状の落ち込み、土坑など10箇所程を確認した。さらに面的に拡張し、また東側で③トレンチを設けたところ新たに4箇所で集石を確認した。なかでも、東側のものは方形に配されると推定された。これらの所属時期・性格は明らかではないが、中央部拡張区の集石より中世の土師質小皿が出土している。また3層は調査区東側では80cm近く堆積し、この辺りに小さな谷が入り込むことが判明した。

これら遺構の確認面までは比較的浅く約40cm前後である。遺物は2層~3層上面及び遺構覆土から出土している。

調査は平成元年6月15日~6月21日(延べ2日間)に実施、発掘面積は約170m²である。

(2) 第2期調査

第1期調査区隣接地約13,750m²を対象に、稻の刈り取り終了後に実施した。まず先の調査と同様の手順で進め、特に出土量が多かった箇所では幅1~3m、長さ10mのトレンチを設けた(④~⑬トレンチ)。一番の層序は先述の通り。ただ、過去に、丘陵裾部上段の水田を削平し下方へ土を移動した模様で、下方の水田では現耕作土下に60cm前後の客土が堆積する。

調査の結果、④、⑬トレンチで穴・溝状遺構2~3箇所、⑮トレンチで小穴5箇所を確認した。他のトレンチでは遺物の出土は認められたものの、湧水等のため遺構の有無確認はできなかつた。これらの遺構確認面(地山)までは浅い箇所で40cm前後(⑮トレンチ)、深い箇所では70~80cm程(⑬トレンチ)と差がある。遺物は1~3層、遺構覆土上面より出土。

以上、調査は平成元年10月17日~10月25日(延べ6日間)に実施、発掘面積は約275m²。

(3) 出土遺物(第4~5図、図版6~7)

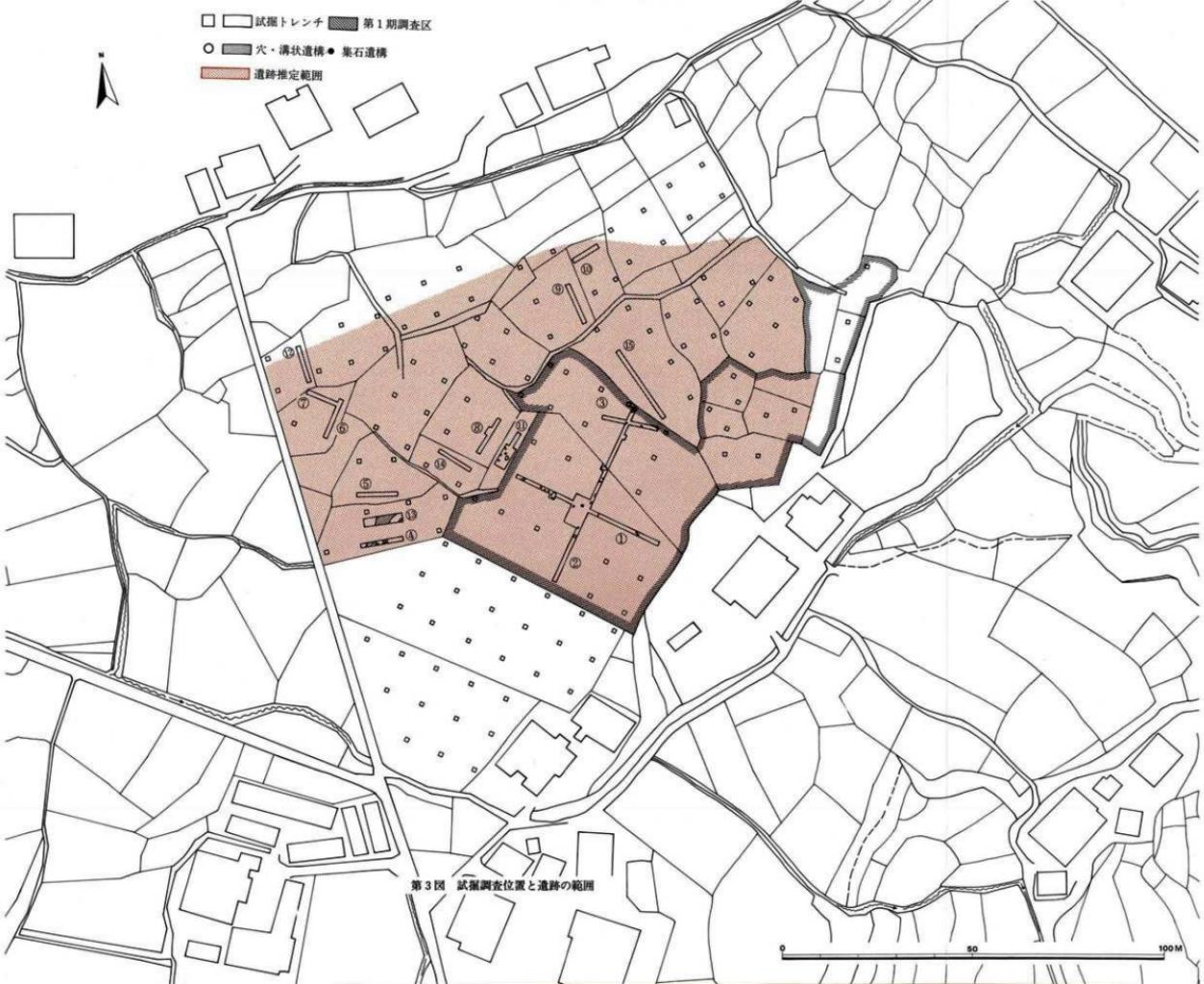
遺物には縄文時代の土器・石器、奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の土師質小皿・青磁・銅鏡、近世の陶磁器がみられる。このうち土師質小皿の出土量が最も多い。

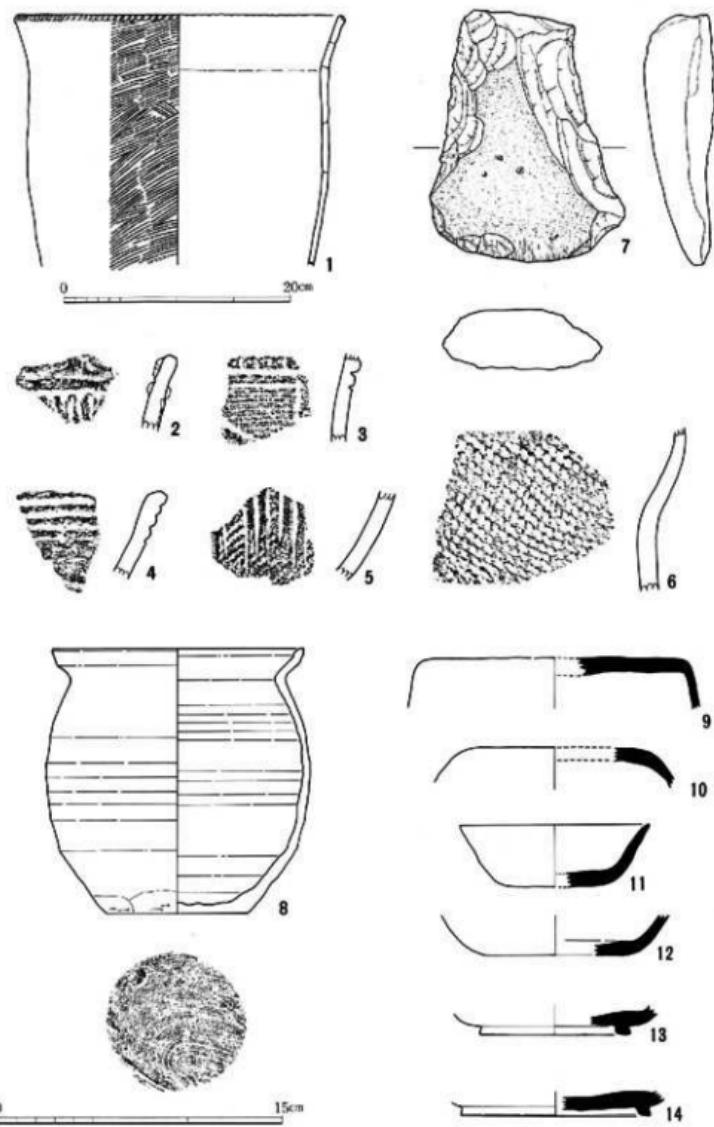
1は縄文時代晩期に属する深鉢形土器である。ゆるく外反する口縁部にやや膨らむ胴部を持つ。口唇部には連続した刻みを施す。口縁部位は横方向の条痕が施されるが、胴部位では斜行するものとなる。②トレンチ出土。なお2~6は今年度の分布調査の際、調査区外の隣接地で採集した縄文土器である。蓮華状文、半截竹管による区画文が見られ、中期前葉新崎式に比定される。7は安山岩質の打製石斧である。大形で横長の剥片を素材とする。刃部は使用による摩耗と線条痕が顕著に認められる。⑥トレンチ出土。

8は口径13.2cm、底径7.5cm、器高14cmを測る土師器小形壺である。口縁部はゆるく内側に折れ、丸くおさめる。口縁部から胴部にかけロクロナデを施すが、底部付近にはヘラケズリを施す。底部は回転糸切りによる切り離しである。時期は9世紀後半と考えられる。②トレンチ出土。須恵器(9~14)には短頸壺の蓋(9)、坏A、坏Bがある。8世紀~9世紀にかかるものと考えられる。

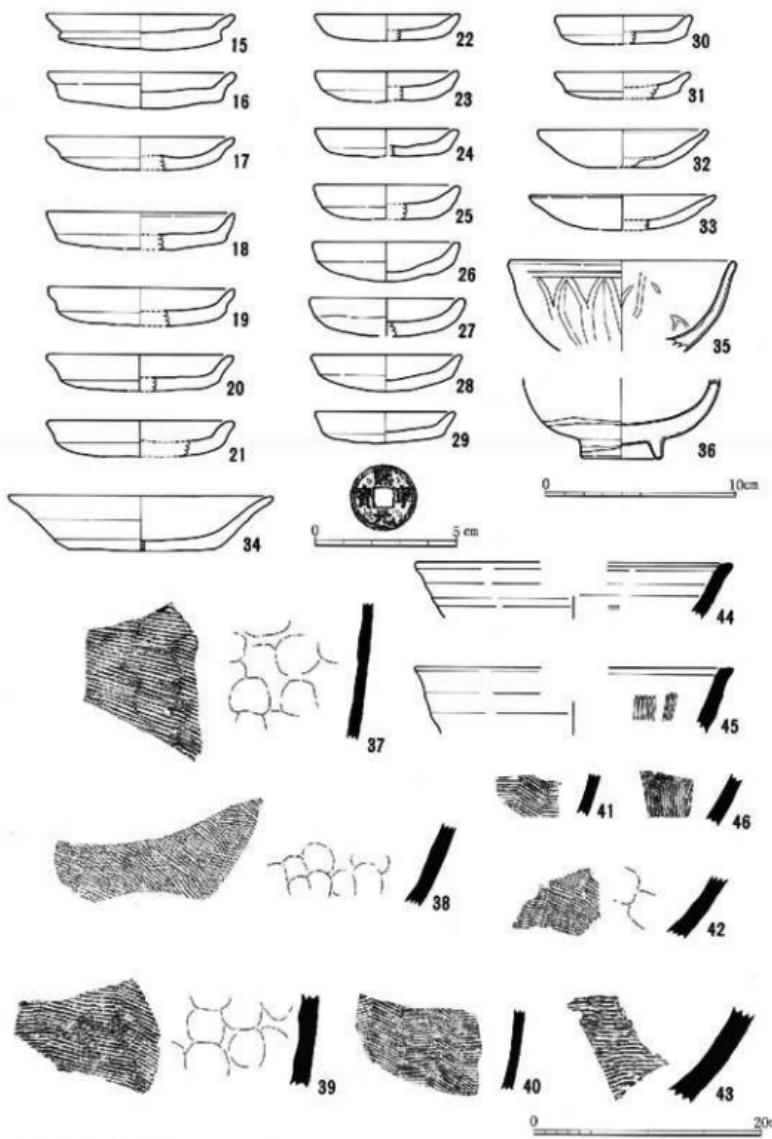
土師質小皿(15~33)は形態的に3類に大別できる。1類は厚手の作りで平底に近い底部に外反する口縁部がつくもの(15~21・29~31)、2類は口径7.5cm前後で体部がやや内湾して立ち上がるるもの(22~28)、3類は体部がゆるく聞くもの(32~33)である。1類は口径10cm前後のものと7.5cmの2種が見られる。3類は薄手の作りで32のように口縁端部をつまみあげる特徴をもつ。34は口径14cm、ゆるく外反する口縁部もつ土師質皿で、やや新しい様相と見られる。

珠洲焼には甕・壺の胴部・片口鉢の口縁部片がある。44、45は体部が直線的に開き部端面はほぼ水平に仕上げられる。時期的には珠洲系陶器の編年【吉岡 1981】の第Ⅳ期頃にあてられよう。35は龍泉窯系の青磁碗と考えられる。縫青灰色の釉がかかり、外面には先の尖がった蓮弁文を施す。内面にも文様施文が何える。34は北宋銭で、「熙寧元宝」と記される。36は半磁器と称されるものの茶碗と考えられ、時期は近世(18世紀頃)。





第4図 遺物実測図 (1 : 1/6、2~14 : 1/6)



第5図 遺物実測図 (15~16: 1/6, 37~46: 1/6, 47: 1/2)

IV. まとめ

1. 白谷岡ノ城北遺跡・白谷竹屋橋Ⅰ遺跡は、奈良・平安時代～中世の遺跡として昭和60年発行の小矢部市遺跡地図・台帳に登載されていたが、これまで詳しく調査されたことがなかった。今回の調査は、当白谷地区に計画された土地改良事業に先立ち、両遺跡の保護措置を講ずるためその範囲・性格等を確認するために実施した試掘調査である。
2. 両遺跡は、渋江川左岸の段丘上に立地し、標高は55～75mを測る。周辺には地形上の条件からも白谷岡村遺跡・白谷柄分Ⅰ遺跡など鶴文時代の遺跡が多く分布する。
3. 調査は2期に分けて実施した。発掘面積は白谷岡ノ城遺跡で約445m²、白谷竹屋橋Ⅰ遺跡で約135m²である。
4. 調査の結果、白谷竹屋橋Ⅰ遺跡では遺構等は確認されず、遺物もわずかに土師器質土器の細片などを出土したにとどまった。このことから、今回の調査地は遺跡のはば外縁部にあたると推定される。
5. 白谷岡ノ城北遺跡では第1期・第2期調査を通じて穴・溝状・集石状の遺構や繩文時代の土器・石器、奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の土師器質土器・輸入陶磁器・古鉢、近世の半磁器などの遺物が確認された。これら遺構・遺物の分布・出土状況に加えて地形的因素等を考慮して、今年度調査対象地内における遺跡範囲を推定した。その規模は約9,200m²である（第3図）。なかでも調査対象地南東側の約2,500m²程が遺構・遺物とともに遺存状態が良好であることを確認した。
6. 調査では、特徴的な遺構として、挙人の川原石を積上げた集石7箇所を確認した。あるいは当時の建造物の柱等の根固め的な用途をもつものとも見てとれるが、現時点では詳細は明らかでない。また、確認した遺構や出土遺物から見て当遺跡は14世紀後半～15世紀代を中心とする集落跡と考えられる。今後の調査によっては、今まで不明瞭であった当白谷地区における歴史時代集落の一様相を解明する上で重要な手掛かりとなろう。

引用・参考文献

- オ 小矢部市 1971 「小矢部市史」
- 小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団 1982 「小矢部市埋蔵文化財分布調査概報 III」
- 小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団 1985 「小矢部市遺跡地図台帳」
- ミ 宮田進一・宇野隆夫・酒井重洋 1988 「越中における中世土器の様相」『北陸の中世土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- ヨ 吉岡康暢 1981 「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』 第27卷第4号 考古学研究会





調査状況



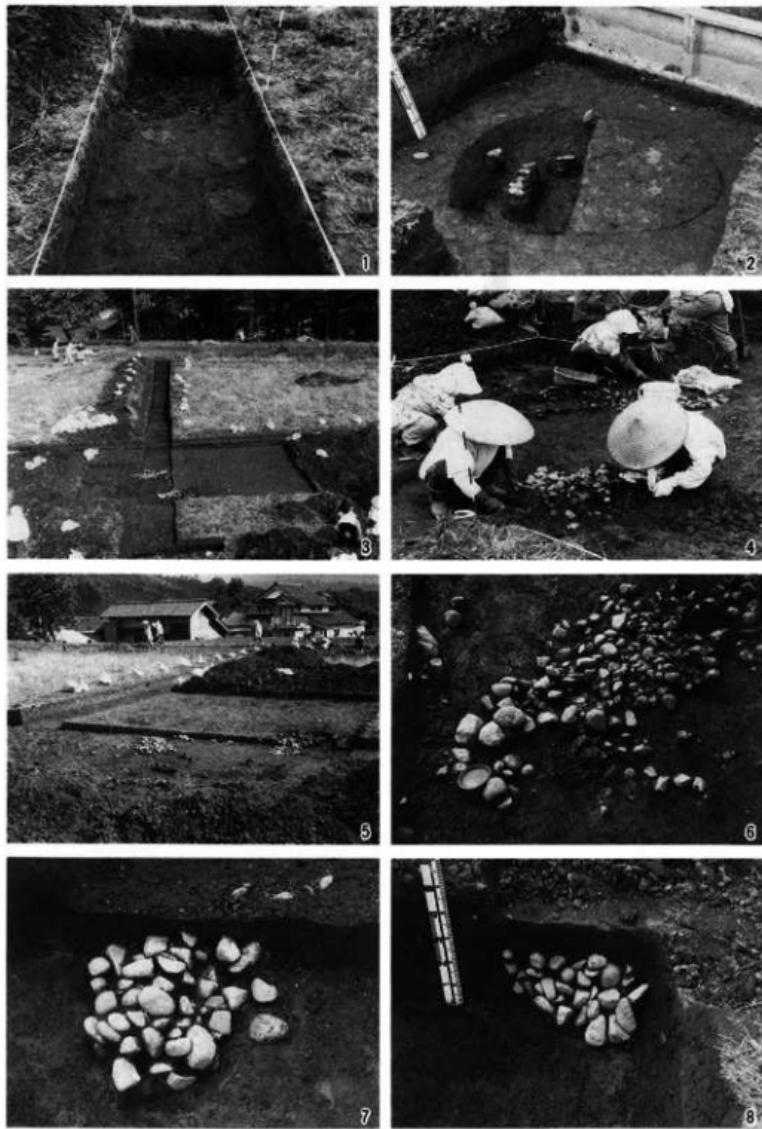
調査状況



農業

図版3

白谷西ノ城北遺跡（第1期調査）



1 遺構確認状況(①トレンチ) 2 遺構確認状況(②トレンチ) 3 調査区遠景 4 作業状況
5 ①、②トレンチ拵張区 6 拵張区集石遺構 7・8 集石遺構(②トレンチ)

図版4

白谷岡ノ城北遺跡



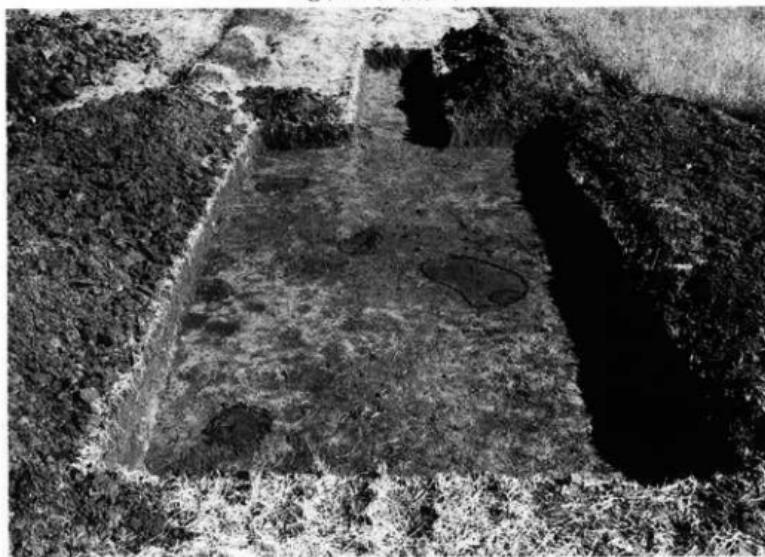
④トレンチ（西より）



溝状遺構（④トレンチ）



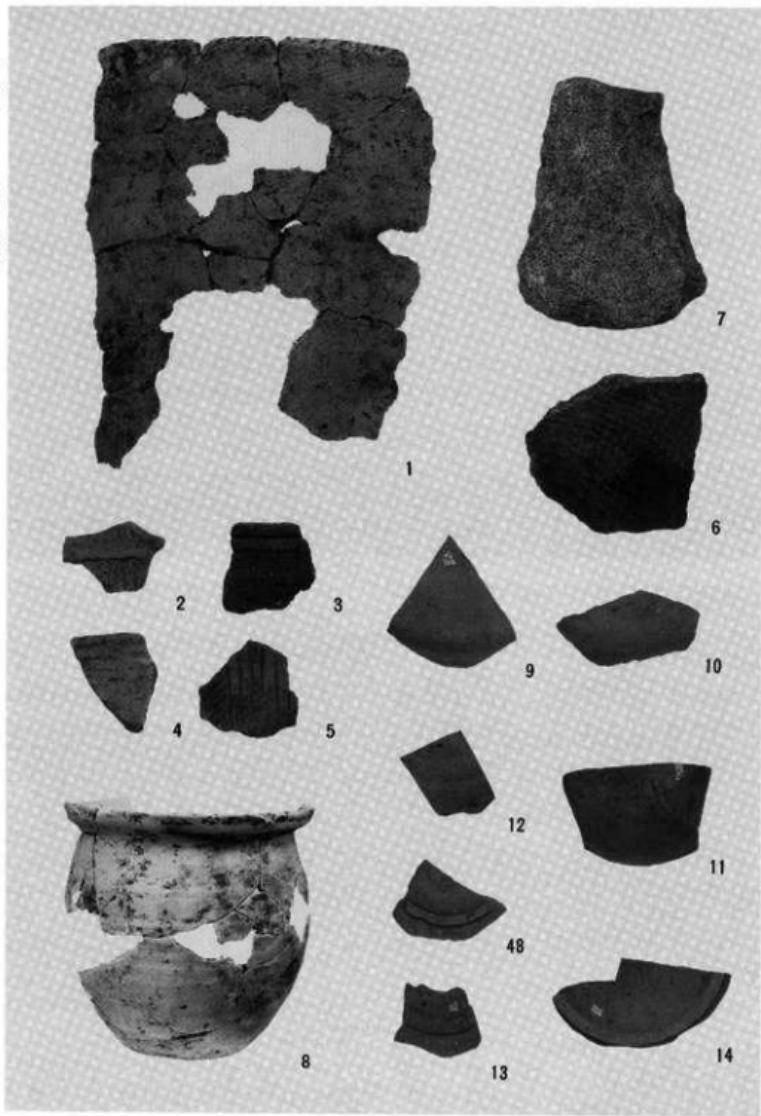
⑩トレンチ（西より）



遺構確認状況（⑪トレンチ）

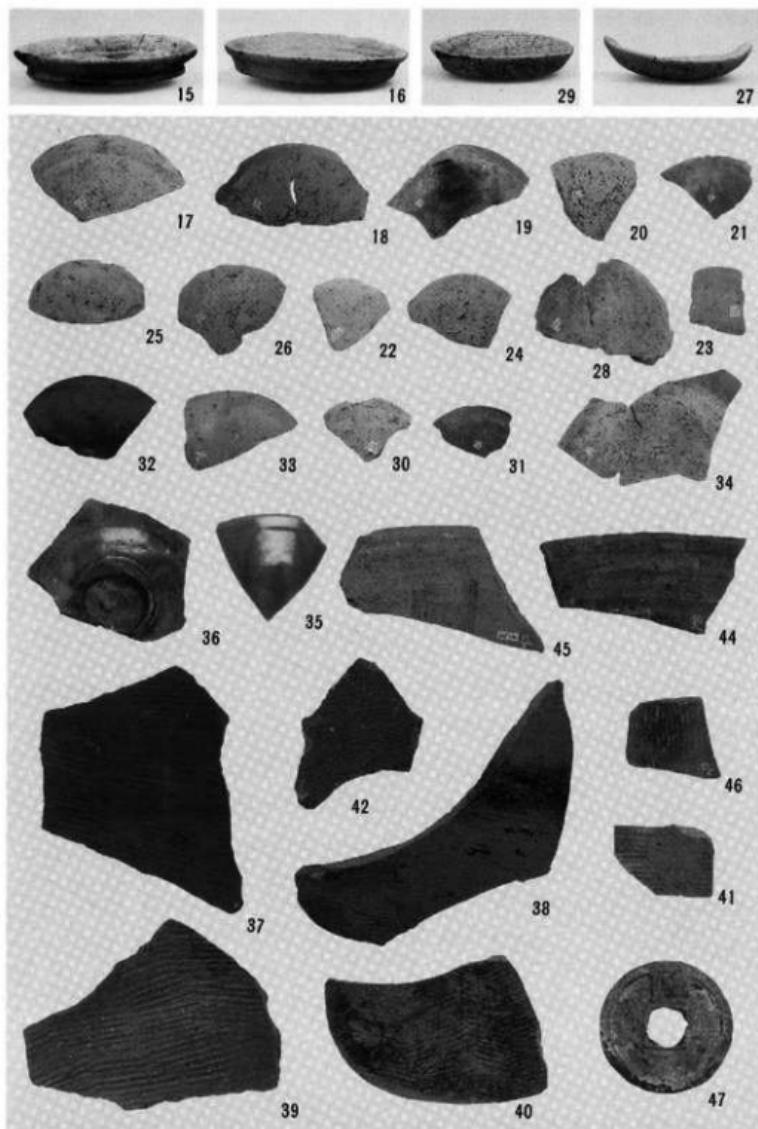
圖版 6

出土遺物 (1/3)



図版7

出土遺物
($\frac{1}{3}$ ・47は実大)



小矢部市埋蔵文化財調査報告書第27冊

富山県小矢部市 白谷岡ノ城北遺跡・白谷竹屋橋I遺跡
—白谷地区上地改良越合整備事業に伴う試掘調査—

発行日 1990年3月31日

編集・発行 小矢部市教育委員会

富山県小矢部市本町1番1号

印 刷 アヤト印刷株式会社

